

長崎縣下離島に於ける「フィラリア」淫浸状況 とその臨床的觀察

長崎大学風土病研究所臨床部（指導；兼任所員 北村精一教授）

片峰大助・山崎豊彦・吉田卯太郎

（本論文の要旨は第二十七回長崎医学会総会にて発表した）

第1章 緒 言

「フィラリア」症は南部アジアに初發し「マレイ」、「ミロネシア」、「メラネシア」、から印度を経て南部支那、中央支那に擴がり之より日本に到來したものだと思はれる。他方「アフリカ」を経て「アメリカ」大陸に蔓延した。

現在 Stolls に依れば「バンクロフト」糸状虫及び「マレイ」糸状虫の感染者は全世界にて18900万に達するものと思はれ中でもアジアは濃厚淫浸地でその数は15700万に及ぶものと推定されてゐる。

本症は我國に於ても寄生線虫類中重要なるものの一つであつて、明治45年75ヶ連隊區の壯丁十一万の調査の結果は北海道を除く殆んど全國にその感染者が發見されてゐる。中でも九州は濃厚淫浸地で鹿兒島、熊本、長崎の3縣には特に高い感染率が見られてゐる。

發見された仔虫は1950年佐々氏が八丈島小島に於てマレイ種を發見した以外は總てバンクロフト糸状虫仔虫とされてゐる。

既に門馬氏は浙江省沿岸、舟山列島を「マレイ」と「バンクロフト」種の兩棲地區となし、小林氏は濟州島、西南朝鮮等は「マレイ」地區となしてゐるが、日本内地に於て50數年に亘り廣範圍の精密な調査が續けられてゐるにもかゝらず未だに「マレイ」種が殆んど發

見されてゐない事は特異な現象である。特に長崎縣は之等「マレイ」地區と地理的にも一衣帯水の間であり又和寇、遣唐使を始めとして古來より密接な交通のあつた歴史的事實から考へても「マレイ」種存在の可能性が考へられる。

長崎縣下の「フィラリア」感染状況は昭和17年一ノ瀬氏が、南松浦郡五島列島を調査して仔虫檢出率13.98%、感染率36.71%の高い淫浸ある事を知り、次いで昭和21年片峰、一ノ瀬は島原半島で仔虫檢出率1.6%、感染率8.67%の成績を得てゐる。發見せる仔虫は何れも「バンクロフト」種で「マレイ」種は証明してゐない。

大學を訪れるフィラリア症患者の分布状態から見て長崎縣全般に亘り相當の淫浸がある事が想像されてゐたのであるが、著者等は長崎縣下全体の調査を企圖し、昭和25—26年にかけて先づ離島即ち、壹岐、對馬、平戸島及その周邊、北五島の宇久島、小値賀島、及び葛島に於て46ヶ所、住民2069名に就き「マレイ」種の檢索を兼ねて「フィラリア」感染状況を調査した。今その成績より最近に於ける「フィラリア」症蔓延の状況及その臨床的、統計的觀察を加へて見たい。

第2章 調査の方法

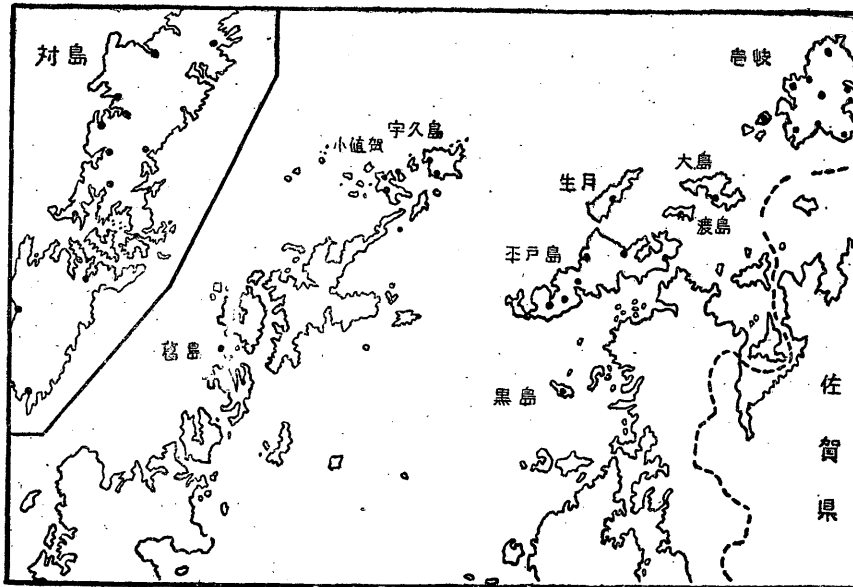
調査地は一村出来るだけ2ヶ所以上を選定、各年令層に亘る様に努力した。集合した一般住民に就き問診、視診、觸診により「フィラ

リア」症の既往及現症の有無を正し、血中仔虫の檢出には午後十一時以後耳朶採血、ギムザ染色を行つて鏡檢し、感染者を摘出した。

以上に依つて得た仔虫検出率、症状具有率及び感染率（症状具有者+仔虫陽者無症状者）は總て算術計算百分率を以て現はしたが、調

査材料の少いものでは之を求めず、總括的觀察に要するものは平均確率誤差 P. E. p を算出した。

第 1 圖



・印は調査地

第 2 章 地域別に見た感染状況

調査人員は壹岐 10ヶ町村 13ヶ所 466名、平戸島及其の周邊島嶼 10ヶ町村 11ヶ所、541名、宇久島 2ヶ所 156名、小値賀島 3ヶ所、204名、葛島全島住民 261名、對馬 17ヶ所 983名

各島嶼別に見ると仔虫検出率は宇久島の $14.935 \pm 2.872\%$ を最高として、葛島の、 $13.026 \pm 2.083\%$ 之に次ぎ壹岐でも $10.515 \pm 1.421\%$ を示し何れも高い検出率を見せ、小値賀、平戸島及其の周邊は少し下つて夫々、 $8.333 \pm 1.935\%$ 、 $6.099 \pm 1.024\%$ 、となつてゐる。發見せる仔虫は何れも「バンクロフト」種で「マレイ」種は發見出来なかつた。

症状具有率即ち既に症状を呈してゐる患者の数は葛島、小値賀、壹岐の順に多く夫々、 $15.708 \pm 2.252\%$ 、 $14.705 \pm 2.479\%$ 、 $13.948 \pm 1.604\%$ 、となつてゐるが症状具有率は必ずしも仔虫検出率と併行するとは限らず例へば宇久島は最も高い仔虫検出率を見てゐるに

もかゝりならず症状具有率は非常に低く $5.844 \pm 1.890\%$ に止まつてゐる。小値賀島では之と逆の現象が見られる。この様な傾向は調査人員の年令的分布が殆んど同様であるにかゝりならず更に小さく各村、部落間にも見られる現象で夫々その土地の特長を示してゐる様に思はれる。

症状具有者に仔虫陽性一見健康者を加へたものを感染者とするとその感染率は對馬を除き平戸島及其の周邊は $13.863 \pm 1.486\%$ 、で稍々落ちるが他の 4 地區は何れも 20% 以上の高い率を示し、特に葛島に於ては住民の四分の一が感染してゐる。

こゝで興味あることは對馬であつて殆んど全島に亘り被検者 983 名中、血中に仔虫を證明し得たものは一名もなく 58 才以上の老人 5 名に症状具有者を見たのみで對馬には「フィラリア」症は殆んどないと云つてよい程その滲浸は稀薄である。(第 1 表、第 2 表)

第 1 表

調	査	地	調査人員	仔虫(+)	症牀(+)	感染者	調	査	地	調査人員	仔虫(+)	症状(+)	染者感
壱	勝本町	鯨伏村	56	3	12	14	宇久島	神ノ浦村(小浜)	32	3	0	3	
			61	12	4	14		ノ (神ノ浦)	124	20	9	29	
				計	156	23		9	32				
	箱崎村(諸津)	102	9	9	16	小値賀		小値賀町(浜津)	45	2	3	4	
	99	田河町(八幡)	ノ (芝辺)	ノ (諸吉)	28			3	4	7			
					131			12	23	30			
					計			204	17	30	41		
	那加村(住吉)	5	0	0	0	葛島			261	34	41	65	
	沼津村(横内)	31	2	7	9								
	渡良村(大島)	17	4	6	10								
初山村(坪)	33	4	10	12									
志原村(久喜)	23	1	2	3									
石田村(南触)	39	5	7	12									
計	466	49	65	106									
岐	平戸島及その周辺	平戸町	84	7	4		11	対馬	琴村(琴)	60	0	0	0
		中野村	32	3	4		7		45	仁田村(富樫)	0	0	0
		紐差村	93	3	10		12			ノ (鹿見)			
		獅子村	20	2	4	5	ノ (大ヶ浦)						
		津吉村	100	4	6	10	峰村(三根)		97	0	0	0	
		中津良村	71	3	0	3	ノ (佐賀)		53	0	1	1	
		志々岐村	100	10	10	18	鷄知町		77	0	0	0	
		大島村	11	0	3	3	ノ		114	0	2	2	
		生月村	17	1	3	4	佐須村		60	0	0	0	
		黒島村	13	0	2	2	船越村		77	0	2	2	
計	541	33	46	75	豆酸村	200	0	0	0				
					ノ	200	0	0	0				
					佐須那町	983	0	5	5				
					豊崎町								
					計								

第 2 表

調査地	調査人員	仔虫(+)	仔虫検出率	症状(+)	症状具有率	感染者	感染率
壱岐	466	49	10.515±1.421	65	13.948±1.604	106	22.746±1.942
平戸	541	33	6.099±1.024	46	8.502±1.198	75	13.863±1.486
宇久	154	23	14.935±2.872	9	5.844±1.890	32	20.779±3.271
小値賀	204	17	8.333±1.935	30	14.705±2.479	41	20.098±2.806
葛島	261	34	13.026±2.083	41	15.708±2.252	65	24.904±2.677
対馬	9.83	0	0	5	0.508±0.071	5	0.508±0.071
計	2609	156		196		324	

他の濃厚淫浸地と地理的に同一位置にあり古來より政治的、經濟的にも密接なる交渉のあつた對馬に何故に「フィラリア」症が殆んどないかと云ふ事は興味ある事實である。又淫浸地に於ても村、部落により可なり感染率

に於て差があり地理的、氣象的に同一條件下にあつても住民の風俗、習慣、生活環境、地勢、微氣候等が微妙な條件を與へるものと考へられる。

第 4 章 年齢から見た感染状況

對馬を除き淫浸地の住民1626名に就いて年齢と仔虫検出率、症状具有率及感染率との關

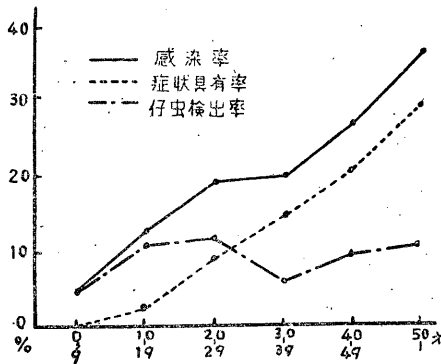
係を觀察して見ると次に示す如く

第 3 表

年 令	調 査 人 員	仔虫 (+)	仔虫検出率	症状 (+)	症状具有率	感 染 者	感 染 率	仔虫 (+)	仔虫 (+)	仔虫 (-)	仔虫 (+) 症状 (+)
								症状 (-)	症状 (+)	症状 (+)	
— 9	105	5	4.762±2.078	0	0	5	4.762±2.078	5	0	0	5 : 0
10—19	466	50	10.729±1.433	12	2.575±0.733	59	12.661±1.540	47	3	9	50 : 12
20—29	354	40	11.299±1.682	31	8.757±1.520	64	18.079±2.043	33	7	24	40 : 31
30—39	235	14	5.957±1.544	33	14.042±2.265	45	19.148±2.537	12	2	31	14 : 33
40—49	221	21	9.502±1.972	45	20.362±2.708	59	26.696±2.975	14	7	38	21 : 45
50—	247	26	10.526±1.952	70	28.340±2.555	87	35.222±3.039	17	9	61	26 : 70

1626

第 2 圖 年齢別感染状況



仔虫検出率は10才台 10.726%±1.433%、20才台 11.299±1.682%と増加して最高を示すがその後は目立つた増加はなくかへつて減少の傾向さへ見へる。50才以上には僅かに増加がある。各地に共通の現象として30才台に仔虫検出率が著明に低かつたことが注目される。

症状具有者は9才以下には全々なく10才台から現はれて年齢と共に漸時増加50才以上では 28.340±2.555%に達してゐる。従つて感染者は9才以下の 4.762±2.078 %を最低に年齢と共に殆んど直線的に増加し50才以上ではその率は被検者の 35.222±3.039%を示してゐる。

第3圖に見る兩實線間の空間は感染者にして血中に仔虫を發見し得ないものの數を示すもので、9才以下の感染者は總て無症状仔虫陽性者であるが年齢と共に感染して居ながら既に仔虫を証明し得ないものの數が増加してゐる事が窺はれる。今試みに感染者中の仔虫陽性者に対する症状具有者數の比を年齢別に見て見ると第3表に示す如く年齢と共に上昇する。29才迄は症状具有者は常に仔虫陽性者より少數であるが30才を境としてその後は後者が前者を凌駕して増加して行く傾向が著明である。要するに「フィラリア」症感染の古い

ものでは次第に仔虫発見が困難になるのではないかと云ふ感を與へる。(第3表、第2圖)

第5章 性別より見たる感染状況

男子 855名、女子 771名中仔虫陽性者は夫々 83名 (9.707±1.012%)、73名 (9.408±1.052%) で大差ないが、症状具有者は男子 120名 (14.035±1.058%) で女子の 71名 (9.209±1.041%) を遙かに凌いでゐるがフィ

ラリア症中最も屢々見られる陰囊水腫が男子側にあるせいではないかと考へられる。従つて感染率に於て男子が僅かに勝つてゐる。

(第4圖)

第4表

性別	調査人員	仔虫(+)	仔虫検出率	症状(+)	症状具有率	感染者	感染率
男	855	83	9.707±1.012	120	14.035±1.058	188	21.988±1.416
女	771	73	9.408±1.052	71	9.209±1.041	131	16.990±1.352

1626

第6章 所謂フィラリア症の臨床的観察

「バングロフト」糸状虫による臨床症状を大別すると突然悪寒、戦慄、發熱等の全身症状を主症状とする所謂「くさふるひ」熱發作や「せんき」と呼ばれる陰囊腫脹、四肢の丹毒様淋巴管炎等の災衝症状と之に續發し、或はその後遺症とも考へられる陰囊水腫、淋巴陰囊、乳糜(血)尿症、象皮病、乳糜性腹水、乳糜性下痢等々の障害性病變とに別けることが出来る。

今回の我々の調査にて得た患者は總計 191名でその發生率は 11.746%、で「くさふるひ」發作は總てのフィラリア症状に先驅して現はれるもので障害性病變を有するもの殆んど之を経験してゐるが、現在「くさふるひ」、「せんき」等の災衝症状のみで未だ障害性病變を見ないもの 95名 (5.842%)、陰囊水腫 70名 (男子の 8.187%)、乳糜尿 22名 (1.353%)、象皮病 19名 (1.140%)、淋巴陰囊 2名 (0.123%) で障害性病變としては陰囊水腫が斷然多い。この外鼠蹊部、股部淋巴腺腫脹を認めたものは尙多數あつたが、フィラリア以外に依る非特異性のものと鑑別に困難なものがあり總て之等は除外することにした。

(第7圖)

第1節 性別より見たる頻度

男女を比較する場合、仔虫検出率に於ては殆んど差異なく症状具有率、感染率に於て男子が女子を凌駕してゐる事は先に述べた。

男子のみに來る陰囊水腫を除くと乳糜尿症男子 16、女子 6 にて男子に多く、象皮病は男子 7 に對して女子 12 で女子に多い。

障害性病變の有無に關せず「くさふるひ」、「せんき」等の熱發作の経験者は、男 82、女 57 となつてゐる。(第5表)

第5表

性別	調査人員	くさふるひ 経験者	陰囊水腫	乳糜尿	象皮病
男	855	88	70	16	7
女	771	57		6	12

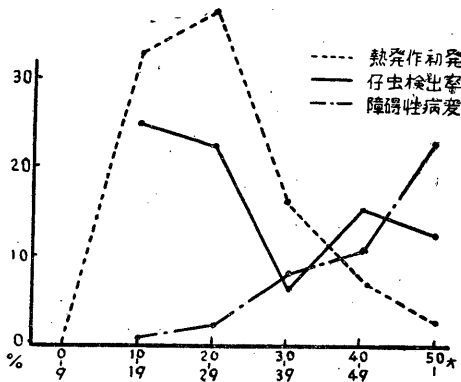
第2節 年令から見た頻度

所謂フィラリア症發病者は年令と共に直線的に増加することは曩に述べた通りであるが之をフィラリア症各症に就いて觀察して見ると。

「くさふるひ」初發年令：初發年令の記憶の比較的明かなもの 104例についてその初發

年齢を見ると10才台に34例、20才台に38例と大部分が30才前の青少年期に発病し、その後に初発を見る者は極めて少い。之に反し、障碍性の病變は9才以下には皆無 30才台から急激に増加してゐる。(第3圖)

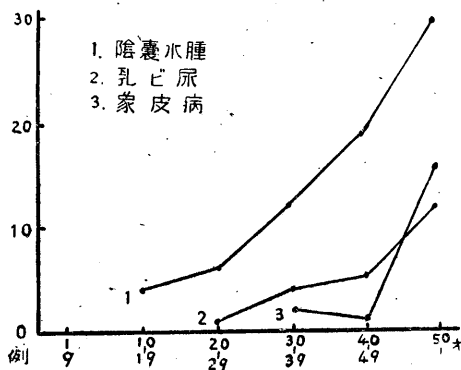
第 3 圖 熱発作初発年齢



先づ陰嚢水腫は10才台では僅か4例であるが年齢と共に増加して50才以上になると30例の多きに達する。乳糜(血)尿症は20才台からぼつぼつ現はれ30才以後に多い。象皮病は30才以前の者にはなく30才台、40才台に3例を見たが他の16名は50才以上の老人で高年に至り發症するものが多い様である。即ち障碍性病變は熱発作初発より遅れて現はれ、陰嚢水腫は最も早く現はれ象皮病は高年者に多い。

(第4圖)

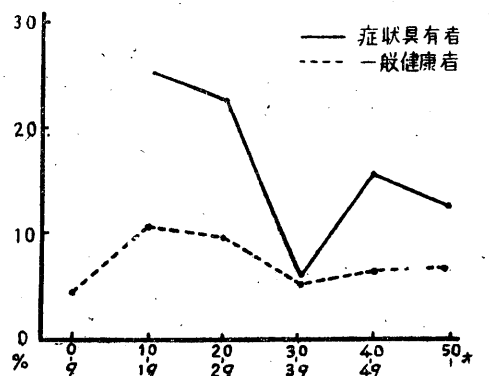
第 4 圖 フィラリア各症の年齢的分布



第 3 節 症状と仔虫検出率との關係

症状具有者 191名中仔虫陽性のもの 28名でその率は 14.660%で、一般無症状健康者の 8.91%に比し常に高率であるが、第3圖、第5圖に示す様に有症状者の仔虫陽性率も10才台 25.0%、20才台 22.6%と若年者に、しかも「くさふるひ」初発の多い年齢層に一致して検出率が高く其の後は年齢と共に低下して行く傾向がある。發病後間もない患者に検出率が高く病歴が古くなると仔虫を証明し難くなる様に窺はれる。

第 5 圖 仔虫陽成率

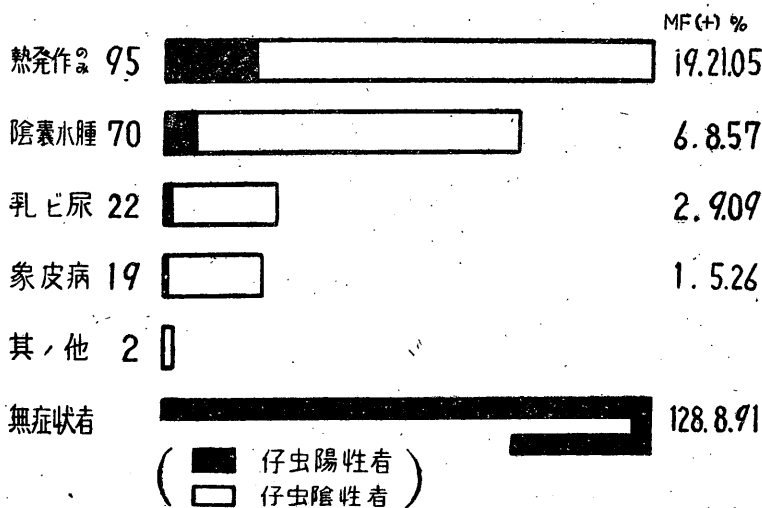


我々の得た仔虫陽性者 156名中 128名は無症状一見健康者でありしかもその中88名は30才以下の青少年である。この事は「フィラリア」感染が今時次第に減少しつつあると云ふ一般の豫想に反し未だ新しい感染が盛に行はれてゐることを如實に物語るものであらう。

(第5圖、第6圖)

各症別に仔虫の検出率を見ると「くさふるひ」、「せんき」等の災衝症状のみで未だ障碍性病變のないものが95名中 19名、(21.052%)で最も高く陰嚢水腫 70名中 6名、(8.571%) 乳糜(血)尿症 22名中 2名、(9.090%)、象皮病 19名中 1名、(5.262%)の如く障碍性の病變を來したものでは著明に検出率が低下する。殊に象皮病にありては定説がある様に非常に低く一般健康者のそれより遙かに下廻つてゐる。(第6圖)

第 6 圖 フィラリア症 191 例



第 7 章 考 察

1) フィラリア症は南部アジアに初發し、支那大陸を経て日本に到來したものと考へられるが、この場合移入は當然帶虫者の往來に依るものであらう。日本内地に何時の時代から、又何處に發生したものかもとより参考となるべき資料はないが想起されるは遣唐使、御朱印船、和寇等の史である。特に御朱印船、和寇は一般民間人の多數關與してゐる點で注目される。日本内地で濃厚淫浸地と目される沖繩、鹿兒島、天草、長崎縣諸島嶼、及び舟山列島、濟州島、浙江沿岸等は和寇の根據地としての史實があり現地人の多數之に關係してゐた事は史書に明かである。又平戸の松浦家は御朱印船の本家として有名である。日本内地に於けるフィラリア症の分布と之等歴史的事實との關連を追求する事により或はフィラリア症の浸入経路と土着との關係を知る事が出来るかも知れない。

2) 浸入したフィラリアがその土地に土着し風土病の形にて蔓延するには之に適した風土、環境が必要である。その條件は複雑多岐にして氣象、地勢、住民の風俗習慣、民度、生物分布等あらゆる因子の綜合されたもので之を明かにする事は難事である。

フィラリアの淫浸には先づ傳播者である蚊

族の消長に關係ある事は論ずるまでもないが蚊族の發生は發生地の狹廣、多少により左右され、地勢、地質、氣温、降雨量、蒸發率等により規定される。又發生した成虫の生育、吸血、増加、壽命は氣象に重大なる關係があることは季節昆虫學等の教へる所である。特に旺盛な吸血と一定度以上の壽命の存續はフィラリア傳播に缺ぐことの出来ない條件と云はなければならぬ。福井(英一郎)氏は日本内地を數多の氣候區に分けてゐるがフィラリア淫浸地の多くはその Eo、又は Ev 氣候區、即ち海洋性、沿岸性の氣候區に屬してゐる。何れにしても濕度の高い、溫度隔差の少い溫暖な氣候即ち大陸度の少い氣候が蚊の發生、生育、活動に好ましい條件であらう事は想像に難くない。

同一地區にあつてもフィラリアの淫浸に著明な濃淡があるのは我々の屢々經驗する所であるが、特に對馬の如く同一緯度にあり濃厚淫浸地に取りかこまれて居ながら全島を通じて殆んどフィラリア症を見ないと云ふ事は如何なる理由に依るものか、フィラリア蔓延と環境的條件を探及する上に貴重な資料である。今昭和25年度の八學會合同對馬調査團地理學班の得た資料と過去 30—50 年間の中央氣象

台の氣象統計より對馬の地勢、氣象とフィラリア淫浸との關係に就いて考察を試みたい。

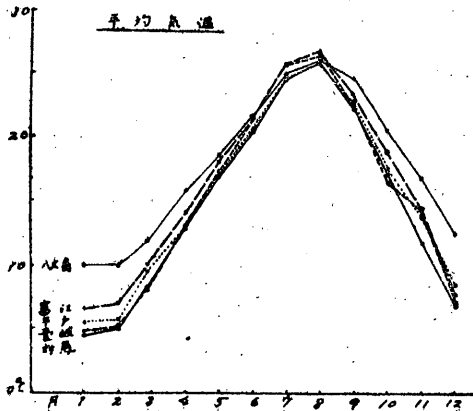
地 勢：對馬は朝鮮海峽にある山の多い島で中央に典型的のリアス海岸を作る淺茅灣が入り込み上、下の二島に分れてゐる。灣の周邊は標高 200 米以下の丘陵性の地形であるが他は 500 乃至 600 米のひだの少ない大柄の山地をなし海岸まで急崖をなしてゐる。岩石は殆んど中世代の頁岩よりなり谷は深く崩解し易い。緯度は北緯 34°より 35°、面積 700 平方杆、その内水田は非常に少い。

降水量：一般に夏に多く豪雨の事が多い。しかも一般に本島は土壌が薄く又中世代の極度に風化した頁岩から出来てゐる所が多く保水量が少く雨が降つても一時に流出する。従つて洪水を起す事が多いが川は 3 日も流れると水無川となるとの事である。年間の降水量は 1730 で少くはないが殘留する水量はきわめて少い。又天水利用の設備は殆んどなく飲料水にも不自由することが少くない。

「あかいえか」の發生する下水溜、どぶ「とうごういえか」が發生する海岸の海水溜等更に詳細なる調査の必要はあるが、水田、濕地等の蚊の發生し得る場所が少い。

氣温：對馬は緯度から云つて大体大阪より和歌山の位置にあり寒暑の程度も東京、大阪と大差がないが、氣温は大阪よりはかへつて低い。大きく云つて東海岸は朝鮮に少々似た氣候を、西海岸は裏日本式の氣候を呈する傾向が強い。

第 7 圖



先づ蚊族の發生、成育、活動に及ぼす氣温影響を見ると(野村、細井)第 6 表の通りである。即ちフィラリア感染に最も密接な關係を持つと云はれる「あかいえか」、「しなはまだらか」に於て成虫の好適氣温は大體 20°C ~ 27°C で、15°C 以下ではその活動は活潑でない、10°C 以下では蚊の發生、活動は例外はあるが殆んど休止すると考へられる。

第 6 表

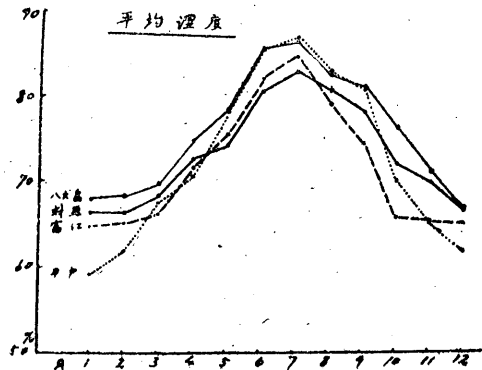
「しなはまだらか」發生、消長好適度(野村)

好適度 Grad	主要因子			
	0	±1	±2	±3
成虫(氣温)	<10 °C	10-15	15-20 >25	20-25
幼虫(水温)	<10	10-20	20-25	>25

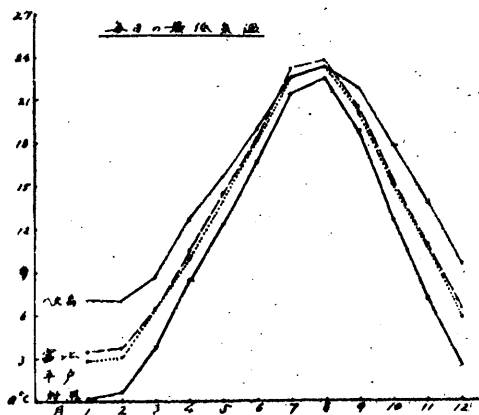
アカイエカ恒温に於ける増加率(細井)

温 度	発所 生要 環 日 数	繁 殖 能 力 (細井)					増 加 率
		遷 化 率	羽 化 率	吸 血 率	産 卵 数	産 卵 率	
5°C	∞	0%	0%	0%	0%	0%	0 倍
14	57	90	90	50	200	100	41
22	24	90	90	90	250	100	91
27	19	90	80	90	200	100	65
32	14	90	70	10	100	50	2
37	13	10	10	0	0	0	0

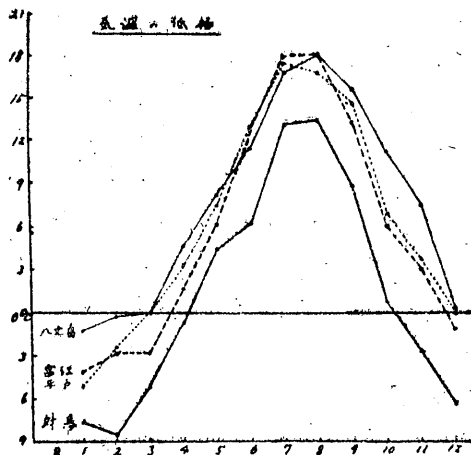
第 8 圖



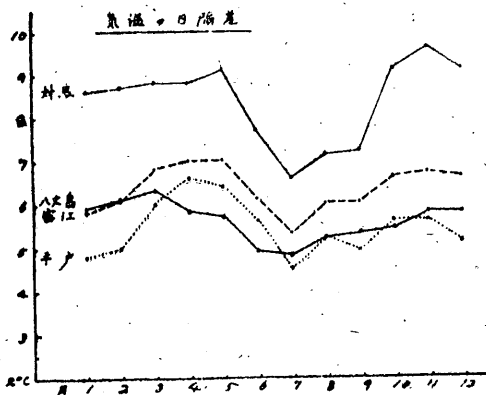
第9圖



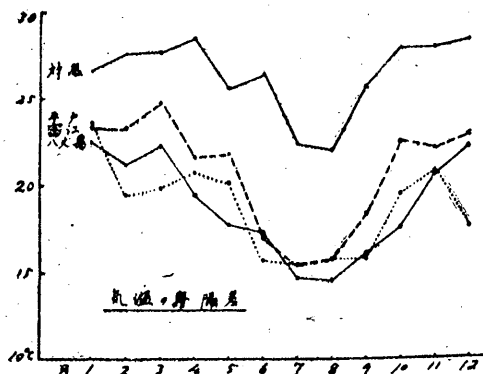
第10圖



第11圖



第12圖



勿論叢林、草むら、濕地等の自然環境により。大氣候 10°C 以下に於ても蚊の生棲に必要な環境が成立することは考へられるが之等とても大氣候にりよ作用されるもので大氣候の気温が大勢を支配するものと考へられる。

勿論湿度との関係も重要であるが極端なる乾燥のない限り種々の微氣候の存在に於て生棲に必要な湿度の存在は可能であり氣溫程重要な因子とはならないと思はれる。

今對馬の氣溫を 近接又は遠隔の「フィラリア」淫浸地のそれと比較して見ると(第7圖~12圖) 一般に寒く平均氣溫に於ても 1—2°C 低く、14°C 以上になるのは5月より10月の間で他の地方よりその期間が2ヶ月短い。最低

溫度が常時 15°C 以上を保つのは6—9月の4ヶ月でも2ヶ月短い。氣溫の低極を見ると6月で 6°C、盛夏でも 13°C 内外の事があり屢々寒波の襲來することが想像される。又9月以降は氣溫の低下が他の地方に比し急速に來る様である。之等の事は蚊の活動期間及び壽命を著しく短縮することが想像される。又氣溫の隔差が甚だしく 4—10月蚊の發生活動時期に於ても 6.8—9°C の隔差があり富江、平戸、八丈島等に比し一日中でも寒暖の差の激しい事を示してゐる。このことは蚊にとつて不都合であり一日の中でも活動時間が制限される即ち同一地方にある五島、平戸に比しても明かに對馬は氣溫が低く寒暑の差が激し

く所謂大陸度が強い一種特有の氣候を有する事が窺はれる。之等氣象條件は明らかに蚊族の活動、壽命に悪影響を與へるものと考へて良からう。湿度に於ては著明な差異は見られない様であるが、之は叢林、草むら、濕地等の存在に於て適當な微氣候の成立が考へられる。

要するに對馬に於ては地形、氣象の面からも蚊の發生、活動、壽命に都合の悪い因子が存在し、フィラリア症のない一因をなしてゐるのではないかと考察する。

3) 對馬を除き長崎縣島嶼に於ては未だに20%以上の濃厚な淫浸があり殊に青少年層に多數の仔虫陽性者を見ることは新しい感染が盛に行はれつゝあると考へねばならない。淫浸地に於て一見健康仔虫陽性者殊に青少年層が感染源として果してゐる役割は大なるものがあり將來我々がフィラリア撲滅對策を講ずる場合忘れてはならない事項であらう。

以上の如くフィラリアの感染は決して下火にはなつてゐないのであるが、重症のフィラ

リア症特に象皮病は近時著しく減少しつゝある事は衆目の認める所である。象皮病の發生機轉についてはフィラリア寄生者に二次的に球菌感染があつて發病するものとされてゐるが最近文化の向上と共に四肢の受傷、球菌の感染の機會が少くなつた事を思へば寧ろ當然であらう。

4) 「フィラリア、マレイ」の存在に就いては更に廣範、精細な調査が必要であるが發見した仔虫はすべて「バンクロフト」種であり又呈する症状から云つても「マレイ」種淫浸を思はせる所はなかつた。

5) 「フィラリア」感染、熱發作の初發、障礙性病變の發現との間には時間的のずれがあり有症状者の仔虫檢出率は無症状健康者のそれより高率であるが、有症状者に於ても若年者、「くさふるひ」熱發作患者に高く、障礙性病變を來したものは著明に低下する。「フィラリア」感染より熱發作、之に續發する障礙性病變の發生と仔虫の消長との間の關係は甚だ興味が感ぜられる。

欄筆に当り御指導御校閲の勞をとられた北村教授、種々御教示下さつた登倉所長、大森教授に深謝し、調査に際し御協力を戴いた県衛生部諸官並現地町村役場の皆様感謝の意を表す。尙この調査研究の一部は昭和26年度文部省科学試験研究費補助金の一部に依つたもので、此處に記して謝意を表す。

文 献

- | | |
|--|---|
| <p>1) 一ノ瀬健吾 : 長崎医学会誌第12巻9号 854-871</p> <p>2) 中央气象台 : 本邦氣象表(昭和17年3月)</p> <p>3) 福井英一郎 : 氣象学(昭13)</p> | <p>4) 大後美保、鈴木雄二 : 日本生物季節論、(昭22)</p> <p>5) 野村 健一 : 害虫氣象通論、(昭22)</p> <p>6) 木原久和外 : 人文 1巻 1号、26-32</p> |
|--|---|

(昭 27. 3. 1 受付)